

39 【街の散策からの気づき発見】

中川散策・「新川橋付近」

会員 K.T.

春日部市には大中小の多くの川が流れている。大きな川は、大落古利根川・中川・江戸川というところだ。この中で、中川は呼び名や流路が変遷したわかりにくい河川である。古くから埼玉県東部低地を流れ、庄内地区に深い関わりがあった川である。時代により、「古河」、「庄内古川」、と呼ばれていた。

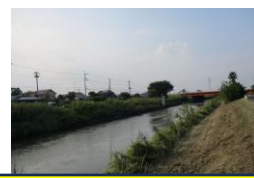
現在の中川は、国土交通省のホームページによると、「(前略)埼玉県羽生市に源を発し、大落古利根川・新方川(にいがたがわ)・元荒川・大場川等、多くの河川を集め南下し、東京都葛飾区高砂で新中川を分派、中川七曲りと呼ばれる蛇行区間を経て、葛飾区上平井で綾瀬川と合流して流れ江戸川区で東京湾に注ぐ流路延長約81kmの一級河川である。(後略)」とある。

旧・庄内古川は、江戸幕府編纂の『新編武蔵風土記稿』に、「(前略)此川、古は江戸川の一派にして国界を流るゝ大河なりしに、中古以来水流やゝ衰へ、正保の国図には既に古河と記せり、其後享保年中水利を考て下流内川村の辺、江戸川と落合所に堤を設け、少く西に退て二郷半領加藤村まで疎通して江戸川に注ぎしが、寛政十二年又其合流の口へ堤を築き下流を穿して今の如く丹後村の東にて江戸川に合流せり(後略)」とある。江戸時代の加藤村は、現在の杉戸町・春日部市の一部・松伏町の一部の地区になるようだ。春日部市史編さん委員会『春日部市史 庄和地域 原始・古代・中世・近世』平成24年(2012)によれば、「(前略)江戸時代、江戸川と庄内古川に挟まれた庄和地区の低地の村々は、木崎・芦橋・倉常・榎・神間・上吉妻・下吉妻・小平・櫛・深輪(現・杉戸町)16村が「上庄内領」、水角・永沼・米崎・赤崎・飯沼・魚沼・金杉(現松伏町)の7村が「下庄内領」と呼ばれる地域に分かれていた。(中略)上庄内領では、中島村(現・幸手市)のいり樋から江戸川の水を取水する中島用水を基幹水路とし、そこから分流する中用水・郷台用水・根用水の三用水をもって灌漑され、いり樋などの水利関連施設は上庄内16ヶ村組合が管理した。なお、この三用水は、すべて領内の悪水路に配水され、その水は上庄内領の上柳村と下庄内領に属する水角村地内のいり樋から庄内古川に排水された。(中略)近世前期における中島用水は、葛西用水として機能していた。ただし、宝永元年(1704)に発生した大水以後は、河道への土砂堆積が進行したため、中島村の元いりから取水することが困難になり、葛西領を始めとする受益地域は慢性的な水不足に悩まされた(中略)。そこで、幕府は、享保4年(1719)に葛西用水の新たな取水源を利根川に求め、これも近世前期に幸手領の用水源として整備された幸手用水路を利用して葛西用水を再整備していった。これによって、葛西用水としての中島用水は、その役割を停止し、中島村のいり樋も廃止された。以降、中島用水は庄内領の用水として再整備された(後略)」とある。この川は、日本三大農業用水の一つといわれる「葛西用水」に関わっていた。

余談ながら、稲作においては、時期に応じ、取水と排水の水の管理が最重要事項である。稚苗を移植後の「活着期」は、やや深水、「分げつ期」は浅水管理により水温・地温を管理、また、育成の促進を図る田干し・溝堀・溝の手直し、「幼穂形成期」は間断かん水、「幼穂形成期以降」は飽水管理、「出穂期」は湛水、出穂後20日から間断かん水、収穫5～7日まえに落水し、田を干し上げて収穫をする。この田に溜まった水の排水を悪水という。川には歴史がある。庄内古川(現中川)は東部低地を流れていたため、悪水の排水路として古くから利用されていたようだ。上下水道の普及で、近年人々は川に触れあうことが少なくなった。川が安全な子供達の遊び場でなくなったことは残念だが、この街は身近に川の散策ができる自然環境がある。川の散策では、四季の移ろいを感じられる贅沢な時間を過ごしている、と思っている。



中川・新川橋

現・中川起点碑
羽生市東7丁目

新川橋から中川上流

現・中川の流路
(羽生市から東京湾)

新川橋から中川下流



現・中川の七曲り